



読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りください。なお、このほかにも、カッパ・ブックスで、どんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本をお読みになりたいと思いますか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一カ

光文社出版局

神吉晴夫

にんげん 十歳の少女の日記

昭和33年11月5日 初版発行 (C) ￥150
昭和34年11月15日 88次発行

著者 安本 末子
神戸市兵庫区荒田町4-38
発行者 神吉晴夫
印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替 東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。 [関川製本]
表紙の模様・意匠登録 116613

にあんちゃん

十歳の少女の日記

安本
末子



商標登録 467067

日

まえがき

いよいよ、この拙なく幼い日記集が出版される運びになりました。それで、この日記集の背景といったもの、あるいは、兄としての感想なりをかんたんに書くようにとのことですが、あまりにもおこがましいようで、とまどう思いばかりが先に立ちます。

ことわるまでもなく、この日記は創作ではありません。また、出版はおろか、投稿などといった発表の目的を前提にして書かれたものでもありません。純然たる日記です。したがって、お読みいただければ、すぐわかることですが、その内容たるや、まことにとりとめなく、中には、恥と思われることさえ、平気で書かれています。しかも、この日記のつけられた時期は、昭和二十八年のことですから、今からざっと五年前のものです。そんなしろものが、どうしていまごろ、出版などという光栄を浴するにいったったか。「禍、福に転ず。」というのは、まったくこのことなのでしょう。病いの床に私が倒れたことによって、そのきっかけは生まれたようなものでした。

昨、昭和三十二年六月二十八日、私は、過労の不注意がもとで、肋膜炎を冒され、病床に横たわる身となりました。日ごろ、健康なときには、何でもないことでも、病床にあっては、とかく気が滅入り、悲観的になるものです。ことに私のばあい、両親亡きあと、四人兄妹（私、良子、高一、

末子^{すえこ}）の長兄として、いわゆる一家の大黒柱という立場にあつてみれば、私が倒れたということ
は、そのまま、明日からの生活にひびく深刻な問題でありました。

が、それはともかく、私は、気が滅入るままに、来し方などが際限もなく思い出され、そこで、
この昔の日記などをひっぱり出しては、読んでみたいような気持になったものでした。そして、
それは、じつにいいことで、「ああ、こんなこともあったのか。」と、弱りはてた私の心を慰めて
くれました。それからというものの、毎日、気が向きさえすれば、この日記を手にするようになって
いたのです。

が、それから二ヵ月ほどたったある日、ふと気づいたのです。「どうして、こうあきもせず、同
じものをくりかえし読んでいられるのか。」と。懐旧の情がそうさせるのだといってしまえば、そ
れまでです。しかし、いかに妹の日記だからといつても、二ヵ月ものあいだ、ほとんど毎日とい
つていいほど読んでいられるものではありません。私は、この疑問について、あれこれと考えを
めぐらしてみました。「これは、単なる日記ではない。それでなければ、こうも人を惹きつけるも
のではない。この日記を読んでいるときの、この感情は、兄としての同情といったものではない。
共感なのだ。これは、誰が読んでも、こう感じるにちがいない共感なのだ。この観察の率直さ。
感じ方のすなおさ。考え方の純真さ。それに文章だって、この年ごろの少女でなければ書きあら
わせない、持味といったものが、方々に光っているではないか。」——この考えが、私の疲れた頭

の中をかけめぐりはじめました。が、もちろん、そこで冷静な判断や反省を忘れてしまうということはありませんでした。

「これは、私の病気のせいにはいかない。もし、ほんとうにそうなら、いままで五年間、一度もそれに気づかなかったということはないはずだ。第一、末子は、作文コンクールなどに入選したことなど、いっぺんだってないではないか。病気のせいだ、病気のせいだ、ばかばかしい。」

しかし、そんな自問自答などで、ひとたびひらめいた、「この日記はすばらしいものだ。」という感じは消え去るものではありませんでした。そして、「これは、自分一人で読んでいるべき日記ではなくて、できるだけ多くの人に読んでもらわねばならないものだ。それが、この日記の当然の宿命だったのだ。私が病床に倒れたのは、その使命を果たすための、何かの意志にちがいない。いや、きつと亡くなった母の遺志に相違ない。」と思われるようになったのです。

末子には、強く反対されました。そこで、「自分だけで、とうてい、この日記の評価ができるものではない。まず当って砕ける。」と、一生の恥をかく思いで意を決し、全日記帳十七冊を一まとめにし、くわしい事情と依頼の手紙をそえて、昭和三十二年十二月、光文社出版局宛に送付したしだいです。

「きょうが、お父さんのなくなった日から、四十九日めです。」というのが、この日記の冒頭ですが（父の死因は、まことにあつけない心臓麻痺でした）、母はこれより六年前に先立っています

目次

まえがき

第一部 お父さんが死んで

- 1 兄さん、ねえさん
- 2 「なんでこんなにお金が……」
- 3 ベンとう
- 4 大雨の日
- 5 滝本先生
- 6 びょうき
- 7 「ストライキは私の大かたき」
- 8 首切り

三

二

二

三

四

五

七

八

九

第一部　お父さんが死んで……

〈昭和二十八年一月二十三日——十二月二日〉

佐賀県東松浦郡入野村 大鶴鉦業所という小さな炭坑町が、この日記の舞台である。この入野村は、その昔「たずね来て、これより西に道もなし 月の入野の……」と西行法師がうたったというほど、佐賀県でも最北西端に位置する一僻村で、大鶴鉦業所は、この村の東寄りの海岸沿いにある人口四千人ほどの炭坑町であった。母親に早く死にわかれた四人兄妹——兄、姉、にあんちゃん（高一）、私（末子）——の末娘が、この日記の筆者である。小学校三年生のとき父親が死に、その一ヵ月ほどのちの一月のある日から、この日記ははじめられている。

1 兄さん、ねえさん

兄さんはいま、三年もまえから、すいせんポタのさおどりをしてはたらいっています、とくべつりんじなので、ちんぎんがすくないのです。

〈一月二十二日 木曜日 はれ〉

きょうがお父さんのなくなった日から、四十九日目です。にんげんはしんでも、四十九日間は家の中にたましいがおると、福田さんのおばさんが、そうしきのときにいわれたので、いままで、まい朝まいばん、ごはんをあげていましたが、きょうの朝は、とくべつに、いろいろとおそなえをしました。

そうして、ながいあいだおがんでいたので、学校へ行くのがすこしおくれましたが、いそいだらまにあいました。

学校からかえつてくると、兄さんが、

「お父さんは、あしたから、もうこの家にはいないのだから、いまからおそなえは、きゅう（旧）の一日と十五日しかない。」といわれました。私は、それを聞くと、とてもかなしくなった。

私は、お父さんのおいはいの前にすわると、なんだか、お父さんが私を見ているような気がし

て、うれしいのです。だけど、一日と十五日しかおそなえをしないなら、ときどきしかあえません。それがかなしいのです。

夕がたおがんだとき、私はお父さんに、

「さようなら、お父さん、さようなら。」といいました。

なみだが、ほおをこぼれた。

へ一月二十六日 月よう日 はれ

学校からかえって、四時ごろ、もち月さんのおつかいをして、家にかえつてくると、となりの吉田のおじさんと兄さんが、しごとのことでおはなしをしていました。よく聞いてみると、兄さんのにゆうせき(入籍)は、できないというおはなしでした。

兄さんはいま、三年もまえから、すいせんボタ(石炭の水洗い)のさおどり(石炭車の運搬)をしてはたらいしています。とくべつりんじ(特別臨時)なので、ちんぎん(賃金)がすくないのです。ちんぎんというのは、はたらいしたお金のことです。それが、ふつうの人より、だいぶんすくないのです。どのくらいすくないのといったら、ざんぎょう(残業)を二時間しても、なんにもならないというほどです。

お父さんがおったときは、ふたりではたらいしていたから、それでもよかったけど、いまはせい

かつにこまるから、にゅうせき(入籍)させてくださいと、ろうむ(労務)のよこてさんにたのんだら、できないといわれたそうです。どうしてできないのといったら、吉田のおじさんのはなしでは、兄さんがちようせん人だからということです。

兄さんは、がっかりしているようでした。「もう、ひるのいもは、四百めしかやかない。」といわれました。私は、べんきょうを、いっしょうけんめいにしようと思いました。

私は、この家から出るのが、かなしくてなりません。この家をはなれるのはいやです。だけど、にゅうせきできないなら、どうなるかわかりません。

へ一月三十一日 土曜日 はれ

朝が目がさめると、きゅうにあたまがおもくて、どうしても、おきあがることができませんでした。学校を休んで、ねていました。兄さんもねえさんも、いろいろしんぱいしていました。

ひるごろ、ねえさんから、おかゆをたいてもらって、つけものをのせてたべたら、だいぶん元氣になりました。

兄さんが、しごとからかえってきて、

「まだ、いたむか。」ときかれたので、

「もう、なおった。」というと、

「学校に行くのがいやだから、あたまがいたいといったのだろう。」といわれました。

私は、だまっていたが、兄さんは、じぶんが、あんなにいたいめにあったことがないので、私にこんなことをいうのだろうと思って、ほんとうに、かなしくなりました。

それにしても、ねえさんもからだが変わるので、家の中には、あんちゃん（二兄ちゃん、つまり二番目の兄さん）がいなければこまるのに、今日にかぎって、あんちゃんはおそかったのでこまった。ねえさんと私と二人でごはんをたきました。

〆二月一日 日曜日 晴〆

今日は、私のはんたいに、あんちゃんがからだが変わるので、ひるからいままでねています。さいわいに、ねえさんがだいぶからだがよくなっているので、ばんも、ねえさんとあらいものをしたり、ごはんをたいたりしました。

七時十分前ごろ、きゆうに兄さんがえいがいくといわれました。私は、兄さんはほんとうにえいがいくのではなく、私たちがどんなにへんじをするかをたしかめるためだろうとおもっている、兄さんは、ほんとうにいくように、おし入れからズボンをだしたりして、えいがちゃんをもつてゆかれました。

私はあっけにとられて、兄さんの行ったあとをじっと見つめていました。兄さんがいったあと、

にあんちゃんがあたまをひやしてといったので、ひやしてやりました。にさんど（二、三度）ひやしたところおきてきて、「はらがひもじい。」といいました。ねえさんが「おかゆをたいてやろか。」といつても「いらない。」といつて、ただ、いものやけたのを、一、三まいたべて、またふとんにもぐってしまいました。私はほんとにしんぱいでした。兄さんは、にあんちゃんしかたよるものはないといっているのに、もし、へんなことでもあったら、兄さんはどんなにしんぱいすることでしょう。私はこんなことをおもうと、もうきがきではありませんでした。

朝、学校へ行こうとして外にでると、ちょうどわるい雨がふってきました。

「雨がふってきた。」といつて、家にはいると、

「ぬれるくらいなら、学校に行かんでいい。」と兄さんからいわれました。かさが、一本しかないからです。

高一兄さん（にあんちゃん）がさしていかなかったので、私がさして行きました。

かいがんに通りに出ると、きゆうに風がつよくなりました。風といっしょに雨も前の方からとんできたので、かさを前にむけて歩きました。そのうちに、雨がもってきたので、上を見ると、いちばん上の糸がきれていました。私は、こわれないだろうかと、ようじんしながらいそぎました。

（二月四日 水曜日 雨）